

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

5 両生類

1. 三重県の両生類相

三重県の両生類は、2目8科22種（外来種1種を含む）が記録されている（清水ほか，2018）．また，近年の遺伝子研究の進展により細分化が進み，県内のカスミサンショウウオはヤマトサンショウウオ *Hynobius vandenburghi*，コガタブチサンショウウオはマホロボサンショウウオ *H. guttatus* に分離された．さらに，タゴガエルおよびハコネサンショウウオについては隠蔽種が見いだされ，それぞれネバタゴガエル *Rana neba*，ホムラハコネサンショウウオ *Onychodactylus pyrrhonotus* が新種記載されている（日本爬虫両棲類学会，2024）．前者は志摩半島（江頭ほか，2016），後者は大杉谷（Yoshikawa and Matsui, 2022）で記録されており，この2種を追加すると24種が本県には生息することになる．

タゴガエルとネバタゴガエル，ハコネサンショウウオとホムラハコネサンショウウオについては，種特定に遺伝子検査が必要であることから，生息状況を把握する上において課題である．また，これまでは亜種扱いであったニホンヒキガエル *Bufo japonicus* とアズマヒキガエル *B. formosus* をそれぞれ独立種とする見解もあるが（Fukutani et al., 2023），今回は従来の説に従った．

2. 調査の概要

既存文献については，清水ほか（2018）により2017年までの情報が収集されていることから，2018年以降の文献を収集した．あわせて，三重県レッドデータブック2015（三重県農林水産部みどり共生推進課，2015）および環境省レッドリスト2020（環境省，2020）に選定されている種を中心に，既存資料に記録のある地点での生息状況についての現地調査を実施した．

なお，分類については日本爬虫両棲類学会（2021）に準拠し，適宜新知見を取り入れた．

3. 絶滅危惧種の概要

サンショウウオ類（有尾目）は，2015年版の掲載種5種と新たにマホロボサンショウウオとホムラハコネサンショウウオの2種を追加し，絶滅危惧ⅠB類2種，絶滅危惧Ⅱ類3種，準絶滅危惧1種，情報不足1種の計7種を選定した．これらの選定理由のなかで，山地溪流性の種についてはニホンジカ（以下，シカ）による森林環境の変化が大きな比重を占めている．増加したシカの食害により，サンショウウオ類の生息環境である森林の下層・林床植生や腐葉土層の消失が進んでいる（梶・飯島，2017）．シカ問題は一朝一夕に解決できる課題ではなく，長期的な視点に立った計画立案が必要であろう．現状は，防鹿柵の設置が主体となっているが，柵を張り巡らすことのできる範囲にも限りがある．捕食者が必要ということで，国外産オオカミを導入することも一部では提唱されているが現実的ではない．そうすると，捕食者となり得るのは人（狩猟者）である．人がオオカミよりも管理しやすいのは明らかであり，狩猟者自体に問題が発生することは考えにくい．課題となるのは担い手不足であり，若者が狩猟者として生計をたてられる50～100年をみすえた枠組みの制度が必要と思う．シカ対策予算を取捨選択し，狩猟者の担い手不足解消に振り分けたらどうか．また，外来種との交雑や捕食圧も減少要因としてあげられており，工事や開発等の人による直接的な関与以外の要因が増加し，対策がより困難となっているのが現状である

カエル類は，2015年版の掲載種3種と新たにニホンアカガエルとヤマアカガエルの2種を追加し，絶滅危惧ⅠB類1種，準絶滅危惧が4種で計5種を選定した．これらの選定理由のなかで目を引くのは，平地から丘陵地にかけての湿地の減少であり，産卵環境を大きく損ねていることが判明した．湿地減少の理由として，水田の圃場整備や耕作放棄，埋め立てなどがあげられており，いずれも人が直接的な影響を及ぼしていることになる．カエル類の多くは稲作とともに繁栄してきたと考えられ，稲作の減少や営農形態の変化により衰退しつつある．カエル保護の機運を盛り上げることにより，湿地環境の創出などの事業が活発になることが期待される．

なお，国のレッドリスト2020に絶滅危惧種として掲載されているアカハライモリとトノサマガエルについては，三重県内においても減少の傾向にあると推測されるが，山地から平地までの広い範囲に生息することから，低懸念（LC）と評価した．

引用文献

江頭幸士郎・松井正文・國領康弘・島田知彦・山田哲也．2016．ネバタゴガエルについて．九州両生爬虫類研究会誌，(7): 50–52．

Fukutani, K., M. Matsui and K. Nishikawa. 2023. Population genetic structure and hybrid zone

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蕨苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

analyses for species delimitation in the Japanese toad (*Bufo japonicus*). PeerJ 11:e16302.

DOI:10.7717/peerj.16302. <https://doi.org/10.7717/peerj.16302/>. (2024年7月22日参照)

梶光一・飯島勇人(編). 2017. 日本のシカー増えすぎた個体群の科学と管理. 東京大学出版会, 東京, 256pp.
環境省. 2020. 【両生類】環境省レッドリスト2020. <https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf>. (2024年7月27日参照)

三重県農林水産部みどり共生推進課(編). 2015. 三重県レッドデータブック2015～三重県の絶滅のおそれのある野生生物～. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津, 757pp.

日本爬虫両棲類学会(編). 2021. 新日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版, 彦根, 232pp.

日本爬虫両棲類学会. 2024. 日本産爬虫両生類標準和名リスト(2024年3月11日版)

https://herpetology.jp/wamei/index_j.php. (2024年7月27日参照)

清水善吉・富田靖男・上田利彦. 2018. 三重県の哺乳類・爬虫類・両生類. みえ生物誌—哺乳・爬虫・両生類, 鳥類, pp.1-102. 三重自然誌の会, 松阪.

Yoshikawa, N. and M. Matsui. 2022. A new salamander of the genus *Onychodactylus* from Central Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Current Herpetology, 41(1): 82-100.

(清水善吉)

両生類レッドリスト

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	掲載頁
				新	旧		
有尾目	サンショウウオ科	ハコネサンショウウオ	<i>Onychodactylus japonicus</i> (Houttuyn, 1782)	EN	VU	—	81
有尾目	サンショウウオ科	ヤマトサンショウウオ	<i>Hynobius vandenburghi</i> Dunn, 1923	EN	VU	VU	81
無尾目	アカガエル科	ダルマガエル	<i>Pelodyx porosus</i> (Cope, 1868)	EN	VU	EN	81
有尾目	オオサンショウウオ科	オオサンショウウオ	<i>Andrias japonicus</i> (Temminck, 1836)	VU	VU	VU	82
有尾目	サンショウウオ科	オオダイガハラサンショウウオ	<i>Hynobius boulengeri</i> (Thompson, 1912)	VU	VU	VU	82
有尾目	サンショウウオ科	ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i> Dunn, 1923	VU	VU	NT	82
有尾目	サンショウウオ科	マホロバサンショウウオ	<i>Hynobius guttatus</i> Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019	NT	—	VU	83
無尾目	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル	<i>Bufo japonicus</i> Temminck et Schlegel, 1838	NT	NT	—	83
無尾目	アカガエル科	ナガレタゴガエル	<i>Rana sakuraii</i> Matsui et Matsui, 1990	NT	NT	—	83
無尾目	アカガエル科	ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger, 1879	NT	—	—	84
無尾目	アカガエル科	ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i> Werner, 1903	NT	—	—	84
有尾目	サンショウウオ科	ホムラハコネサンショウウオ	<i>Onychodactylus pyrrhonotus</i> Yoshikawa et Matsui, 2022	DD	—	—	84

ハコネサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Onychodactylus japonicus (Houttuyn, 1782)

【選定理由】2000年以降の生息確認地点数は5程度。出現範囲は広いが局所分布であり、生息環境は限定的かつ悪化傾向が顕著であることからVUからENに変更。

【種概要】山地溪流性。体は細く尾が長い特徴があり、全長180mm前後まで成長する。数年の幼生期を河川源流部の水中で過ごし、変態後は陸上生活となり林床で昆虫やクモ、ミミズなどを捕食する。

【分布】本州と四国に分布する日本固有種。県内ではいなべ市、伊賀市、津市、松阪市、大台町で確認されている。

【現況・減少要因】鈴鹿山地（いなべ市）と台高山地（松阪市、大台町）では比較的多く生息している。一方、伊賀市や津市の生息地は狭い範囲に細々と生息している状況であり、これらの生息地は林道工事や治山事業による影響を受けやすく、また、ニホンジカの食害による林床植生の消失は広範囲に及んでおり、生息環境の悪化は著しい。

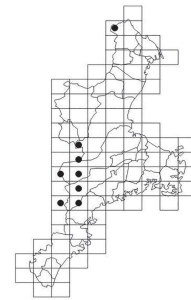
【保護対策】保護対策は講じられていないのが現状であるが、県指定の天然記念物であるオオダイガハラサンショウウオに準じた扱いが必要である。

【特記事項】ホムラハコネサンショウウオ *O. pyrrhonotus* との識別には遺伝子検査が必要であり、種特定が課題である。

【文献】4, 7, 10.

(清水善吉)

(写真：いなべ市、2006年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

ヤマトサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Hynobius vandenburghi Dunn, 1923

【選定理由】いずれの生息地も丘陵地林縁部周辺であり、耕作放棄による荒廃や各種開発による消滅・減少傾向が著しいためVUからENに変更。

【種概要】丘陵地林縁部の林床に生息する低地性かつ止水性の代表的な小型サンショウウオ。成体は全長100mm内外で、背は暗褐色、通常、尾の上下縁は黄色を呈するが変異も多い。繁殖期は1～4月頃で、林縁部の土水路、水田などに一対のバナナ状の卵囊を産む。

【分布】日本固有種。近畿地方東部から中部地方南部の丘陵地から低山地に生息する。県内では、いなべ市、桑名市、鈴鹿市、亀山市、津市、松阪市、志摩市、伊賀市で記録がある。

【現況・減少要因】生息地は比較的広く県内に点在するが、いずれの繁殖地も局所的で産卵規模が小さい。減少要因としては、耕作放棄に伴う産卵場所の消滅や各種開発による生息地の消滅、アメリカザリガニやアライグマによる捕食などがあげられる。

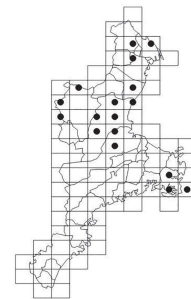
【保護対策】丘陵地の開発抑止ならびに保全、管理、休耕地の自然環境復元・整備。林縁部における湧水地や浅い水場の創出などの繁殖環境の保全・整備が必要。

【特記事項】特定第二種国内希少野生動植物種。

【文献】7, 10.

(富田靖男・上田利彦)

(写真：津市、2008年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	VU

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ダルマガエル

無尾目 アカガエル科

Pelopylax porosus (Cope, 1868)

【選定理由】県内各地で見られるが、いずれの生息地でも個体数は少ない。水田の構造改革事業や放置による乾田化、都市化による水田、湿地の埋め立てなどで生息地の減少傾向が顕著なためVUからENへ変更。

【種概要】主に水田とその周辺に生息している。トノサマガエルと似るが背面から腹部にかけての黒褐色紋が原則的に独立している点や、背中の隆条がなめらかな点、四肢が短い点などで区別がつく。背中線は全くない、不明瞭、明瞭なものが混在する生息地もある。体色は茶褐色から緑色まであり、雌雄の差はない。頭胴長35～73mm。

【分布】中部地方南部から山陽地方東部にかけてと四国の一部に分布する。県内では北中部から伊勢志摩地方にかけて生息している。

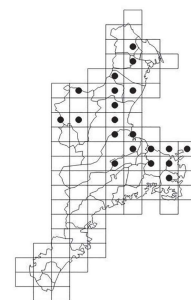
【現況・減少要因】局所的に分布している地域が見られ、トノサマガエルと混生する地域も多い。近年の乾田化や圃場整備、都市化による埋め立てなどで産卵場、生息地が消失しており、個体数の減少が危惧されている。また、消失した生息地もある。

【保護対策】保護対策は講じられていないのが現状であるが、休耕地のビオトープ化などは個体数回復に有効である。

【文献】1, 3, 7, 8, 10, 12.

(三谷伸也)

(写真：伊勢市、2020年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	VU
環境省 2020	EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

オオサンショウウオ

有尾目 オオサンショウウオ科

Andrias japonicus (Temminck, 1836)

【選定理由】木津川水系のみに生息。保全対策は講じられているが、堰等による生息地の分断が課題である。また、交雑種による在来種の圧迫が確認されている。

【種概要】現生両生類中最大の種で全長 150 cm まで成長するが、通常は 60 ~ 70 cm の個体が多い。変態後も一生を水中で生活し、魚や蛙、サワガニなどを食べている。

【分布】岐阜県以西の本州、九州、四国に分布する日本固有種。県内では伊賀市、名張市、津市に生息。

【現況・減少要因】伊賀市北部では、生息の確認されているのは河合川上流だけであるが、そこでも最近の繁殖情報は無い。津市名張川においても同様である。伊賀市南部では比較的多くの個体が確認され、繁殖情報もあるが、堰による遡上阻害により各上流域に分布の空白が認められる。また、名張市では、別種チュウゴクオオサンショウウオとの交雑化が進行し、一部河川では交雑種に置き換わっている。

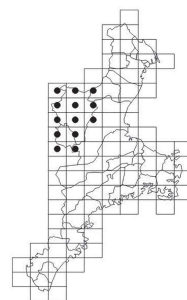
【保護対策】保護管理指針により保護施策が講じられているが、対策効果の検証と改訂が必要。また、堰の解消等の保全工事の事業化が求められる。名張市により在来種保護事業が実施されている。

【特記事項】国指定特別天然記念物。

【文献】5, 6, 7, 10.

(写真：伊賀市, 2024年)

(清水善吉)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

オオダイガハラサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Hynobius boulengeri (Thompson, 1912)

【選定理由】県中南部に局所分布。生息環境は限定的かつ悪化傾向にあり、違法捕獲の懸念がある。

【種概要】山地溪流性。小型サンショウウオ類の中では大型で全長 200 mm 前後まで成長することがある。2 ~ 3年の幼生期を河川源流部の水中で過ごし、変態後は陸上生活となり林床で昆虫やクモ、ミミズなどを捕食する。

【分布】紀伊半島固有種。県内では津市、松阪市、大台町、大紀町、紀北町、尾鷲市、熊野市、紀宝町で確認されている。

【現況・減少要因】県南部では比較的多く生息するが、林道工事や治山事業、ニホンジカの食害による森林荒廃の影響により生息・繁殖環境が悪化し、消滅した箇所もある。津市の唯一の生息地は三重大学演習林であるが現況不明。

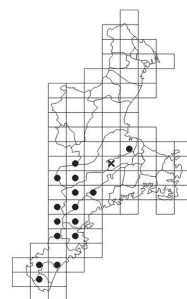
【保護対策】保護管理指針により保護施策が講じられているが、対策効果の検証と改善が必要である。また、一部マニアによる違法捕獲に対しては摘発が有効である。捕獲に対する抑止力向上のためには生息全県で法規制をかけることが効果的であり、種指定をしていない奈良県との協議・調整が急務である。

【特記事項】県指定天然記念物、特定第二種国内希少野生動物種。

【文献】4, 7, 10, 13.

(写真：大台町, 2007年)

(清水善吉)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

ヒダサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Hynobius kimurae Dunn, 1923

【選定理由】県北中部に局所分布をする。生息環境は限定的で悪化している。

【種概要】山地溪流性で全長 95 ~ 140 mm 前後。1 ~ 2年の幼生期を河川源流部の水中で過ごし、変態後は陸上生活となり、林床で昆虫やクモ、ミミズなどを捕食する。

【分布】本州中部から中国地方に分布する日本固有種。本県および奈良県が南限であり、オオダイガハラサンショウウオの分布域と重ならない。県内ではいなべ市、菰野町、鈴鹿市、亀山市、津市、伊賀市、名張市で確認されている。

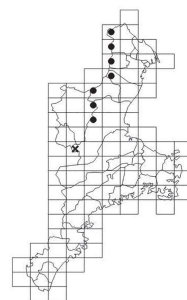
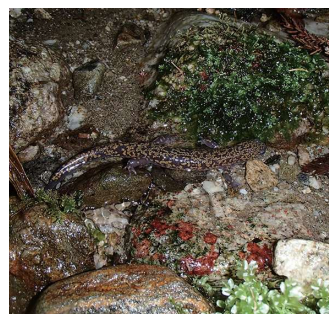
【現況・減少要因】鈴鹿山地と布引山地では最近も生息が確認されているが、室生山地（名張市）の記録は100年近く前（1931年）のものであり、現在は生息しない可能性が高い。林道工事や治山事業、ニホンジカの食害による森林荒廃が生息・繁殖環境を悪化させている。とくに、布引山地では風力発電開発が大規模に行われており、広大な裸地の出現による乾燥化や側溝等の落差のある構造物の敷設は、本種を含めた両生類にとっての影響は甚大である。

【保護対策】保護対策は講じられていないのが現状であるが、県指定天然記念物であるオオダイガハラサンショウウオに準じた扱いが必要である。

【文献】4, 7, 10.

(写真：伊賀市, 2013年, 大沼弘一撮影)

(清水善吉)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

マホロバサンショウウオ

有尾目 サンショウウオ科

Hynobius guttatus Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019

【選定理由】県内全域で記録があるが、確認個体数は少なく、低密度である。生息環境が悪化している。

【種概要】山地性で全長 70 ~ 140 mm、伏流水中で産卵し、幼生期を過ごすため、流水中で幼生の確認はできない。変態後は森林生活となり、林床で昆虫やクモ、ミミズなどを捕食する。

【分布】中部・近畿地方に分布する日本固有種。県内ではいなべ市から熊野市にかけての山地に分布。東紀州の山地が海に迫っている地域では、沿岸の低標高地にも生息する。

【現況・減少要因】他の溪流性サンショウウオのように幼生期を流水内で過ごさないため、生息の確認は容易ではない。そのため、分布状況を把握することなく、自動車道や林道の建設、風車や太陽光発電事業が行われており、多くの個体が死滅していると思われる。また、ニホンジカの食害による森林荒廃は著しく、低木層や腐葉土層が貧弱化しており、本種を含めた林床を生息環境とする小型サンショウウオ類に大きな影響を及ぼしている。

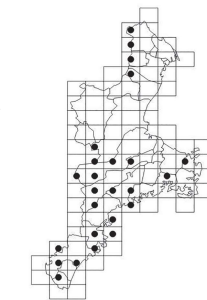
【保護対策】開発にあたっては、調査を十分にを行い、確認個体を安全な場所に移す等の対策は最低限必要である。

【特記事項】特定第二種国内希少野生動植物種。

【文献】4, 7, 10.

(清水善吉)

(写真：松阪市，2024年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

—

環境省 2020

VU

ニホンヒキガエル

無尾目 ヒキガエル科

Bufo japonicus Temminck et Schlegel, 1838

【選定理由】県内各地で平地から山間部にかけて広く見られるが、圃場整備、水田の乾燥化、池・湿地の埋め立てなどで繁殖場所が減少している。

【種概要】本種は現在、基亜種であるニホンヒキガエル *B. j. japonicus* とアズマヒキガエル *B. j. formosus* に分類されている。生息地は海岸近くから1,900 m の高山に及ぶ。頭胴長80~176 mm。

【分布】本州の近畿以西、四国、九州、奄岐島、五島列島、屋久島、種子島に分布。三重県では広い範囲で分布している。

【現況・減少要因】平地では、繁殖場所に適した池や湿地の減少、移動経路の遮断、轢殺などにより、生息環境が悪化している。山間部でも、繁殖場所である比較的浅い水域が減少しており、個体数が減少傾向にある。

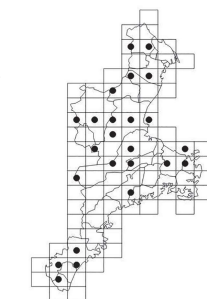
【保護対策】道路などを開発する際、生息地・繁殖池を通るのであれば、それらの代替え地を整備したい。また、新しい道路の路肩に「返し」などを設け、進入防止策を講ずるとともに移動経路も確保する必要がある。

【特記事項】県内には基亜種であるニホンヒキガエルと亜種であるアズマヒキガエルが分布している。なお、両亜種を別種とする見解もある。

【文献】2, 3, 7, 10, 11, 12.

(三谷伸也)

(写真：鳥羽市，2022年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

ナガレタゴガエル

無尾目 アカガエル科

Rana sakuraii Matsui et Matsui, 1990

【選定理由】生息確認地点数は10以下、出現範囲は狭く局所分布であり、生息環境は限定的である。

【種概要】山地溪流性のアカガエル的一种。頭胴長38~65 mmで、雌の方が大型。2月に溪流中の岩の下などに産卵する。幼生は6~7月に変態して陸上生活となり、林床の昆虫やクモなどを捕食している。

【分布】本州にのみ分布する日本固有種。県内では津市、松阪市、大台町で確認されている。

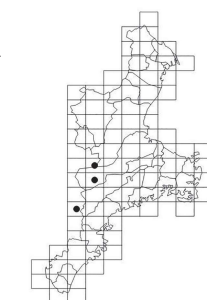
【現況・減少要因】各生息地においても、生息が確認できる範囲は極めて狭く、また個体数も多くない状況である。もともと低密度であったのか、森林開発等により減少したのかは不明であるが、治山ダム等の建設による河床の平坦化は、繁殖環境の消失につながるとの指摘もある。

【保護対策】保護対策は講じられていないのが現状であるが、林道や治山の工事に際しては、本種の生息調査を実施し、現況を極力改変しないような対策を講じる必要がある。また、分布状況が十分に把握されているとは言えない状況であり、本種も含めたこのような種については今後、県博物館を中心とした県機関が実態把握に積極的に取り組むことが保護につながる。

【文献】7, 9, 10.

(清水善吉)

(写真：津市，2006年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ニホンアカガエル

Rana japonica Boulenger, 1879

無尾目 アカガエル科

【選定理由】生息地である平地や丘陵地林縁部、水田などが、開発や水田放棄などにより消滅、減少している。

【種概要】平地から丘陵地の林縁や水田などにみられる代表的なアカガエル。頭胴長34~67 mmで、雌の方が大型。体色は黒褐色から赤茶色で、背側線はほぼ直線的。林床の昆虫やクモを捕食する。早春に水田や湿地に集まりつぶれた球形の卵塊を産む。

【分布】本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島に分布する日本固有種。県内では桑名市、菰野町、四日市市、鈴鹿市、亀山市、伊賀市、津市、松阪市、明和町、多気町、伊勢市、鳥羽市、志摩市、尾鷲市で確認されている。

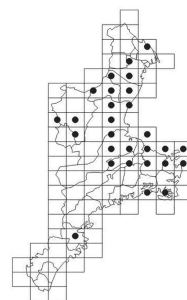
【現況・減少要因】県内の広域に分布するが、個体数が減少している生息地が増えている。開発による林や湿地の消失、林床の荒廃、水田放棄や乾田化による繁殖期の止水域の減少などが要因として考えられる。

【保護対策】水田などの湿地環境と周辺林縁部の保全、特に繁殖地となる止水域は、復元・創出も含めた保全管理が必要である。そのためには、市民の理解が不可欠であることから、本種やトノサマガエル等の平地を主たる生息地とするカエルを用いた啓発活動を進めるべきである。

【文献】3, 7, 10.

(梅村有美)

(写真：朝日町、2021年、塩崎哲哉撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ヤマアカガエル

Rana ornativentris Werner, 1903

無尾目 アカガエル科

【選定理由】生息地である山地や丘陵地林縁部周辺の繁殖地が各種開発による消滅や環境の悪化が著しい。

【種概要】主に山地や丘陵地林縁部の林床に生息する。成体は頭胴長36~87 mmで、雌の方が大型。背面は褐色または赤褐色で暗褐色または黒褐色の不規則な斑紋がある。腹面の斑紋は鮮明である。背側線は鼓膜付近で外側に曲がる。繁殖期は1~4月頃、山地や丘陵地林縁部の湧水地の水たまりや土水路などの止水域で球状の卵塊を産む。

【分布】日本固有種で、本州、四国、九州、佐渡島に分布する。県内では、桑名市、菰野町、四日市市、鈴鹿市、亀山市、津市、松阪市、多気町、大台町、伊勢市、大紀町、伊賀市、熊野市、紀宝町で記録がある。

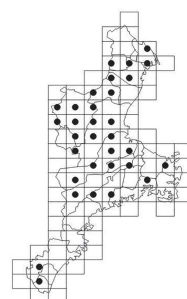
【現況・減少要因】県内に広く分布するが、近年、確認数が減少している。減少要因としては、各種開発による林床の乾燥化や丘陵地林縁部の荒廃に伴う繁殖場所の消滅などがあげられる。

【保護対策】生息地である山地や丘陵地の開発抑止ならびに保全、自然環境復元・整備。林縁部における湧水地や浅い水場の創出などの繁殖環境の保全・整備が必要である。

【文献】3, 7, 10.

(上田利彦)

(写真：伊賀市、2004年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

—

環境省 2020

—

ホムラハコネサンショウウオ

Onychodactylus pyrrhonotus Yoshikawa et Matsui, 2022

有尾目 サンショウウオ科

三重県 2025

DD

三重県 2015

—

環境省 2020

—

大台町の大杉谷源流で記録がある。

【特記事項】特定第二種国内希少野生動植物種。

【文献】14.

(清水善吉)

文 献

- 1 土井敏男. 2020. 植物の登はんによるダルマガエルの水路からの脱出事例. 兵庫陸水生物, (71): 31-34.
- 2 Fukutani, K., M. Matsui and K. Nishikawa . 2023. Population genetic structure and hybrid zone analyses for species delimitation in the Japanese toad (*Bufo japonicus*) PeerJ 11:e16302. <https://doi.org/10.7717/peerj.16302/> .(2024年7月22日参照)
- 3 前田憲男・松井正文. 1999. 改訂版 日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京, 223pp.
- 4 三重県教育委員会. 2009. 三重県指定天然記念物オオダイガハラサンショウウオ保護管理指針. 三重県教育委員会, 津, 49pp.
- 5 三重県教育委員会・奈良県教育委員会. 2012. 特別天然記念物オオサンショウウオ保護管理指針 2012. 三重県教育委員会・奈良県教育委員会, 津・奈良, 59pp.
- 6 三重自然誌の会 (編). 2023. オオサンショウウオ緊急調査報告書. 名張市, 名張, 66pp.
- 7 日本爬虫両棲類学会 (編). 2021. 新 日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版, 彦根, 232pp.
- 8 大河内勇・宇都宮妙子・宇都宮泰明・沼澤マヤ. 1997. ダルマガエル (*Rana porosa brevipoda* Ito) 岡山種族の飼育下での繁殖と絶滅が危惧された個体群への補強的な再導入. 保全生態学研究, 2: 135-146.
- 9 清水善吉. 2014. 三重県におけるナガレタゴガエルの生息状況. 三重自然誌, (14): 62-64.
- 10 清水善吉・富田靖男・上田利彦. 2018. 三重県の哺乳類・爬虫類・両生類. みえ生物誌—哺乳・爬虫・両生類, 鳥類. pp.1-102. 三重自然誌の会, 松阪.
- 11 富田靖男. 1994. 三重県の両生類. 三重の生物, pp.141-143. 三重生物教育会, 津.
- 12 上田利彦. 2017. 三重県内で確認した哺乳類, 鳥類, 爬虫類および両生類の記録. 三重自然誌, (15): 129-143.
- 13 上野裕介・江口健斗. 2023. 小型サンショウウオ類から見たインターネット・オークションによる希少野生生物の取引実態. 保全生態学研究, 28: 67-79.
- 14 Yoshikawa, N. and M. Matsui. 2022. A new salamander of the genus *Onychodactylus* from Central Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Current Herpetology, 41: 82-100.

哺乳類

鳥 類

爬虫類

両生類

汽水・
淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝 類

甲殻類

その他
動物

維管束
植 物

蘚苔類

藻 類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

